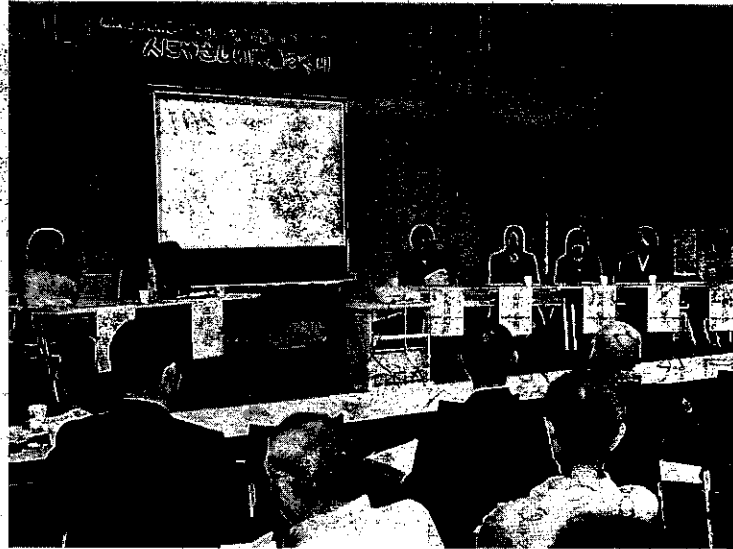


# 自転車シンポ、有効活用探る

## 専用レーン利用の課題も



自転車専用レーンの利用実態について意見交換するパネリスト（旧宇部銀行館で）

第5回自転車まちづくりのシンポジウムin Ube「人に優しい交通づくり」は21日、旧宇部銀行館（ヒストリア宇部）で約60人が出席して開かれ、自転車が有効活用されるまちを目指して意見交換した。うべ交通まちづくり市民会議（三浦二まち）主催。市地球温暖化対策ネットワーク（UNCCA）共催。

基調講演では古池弘隆宇都宮共立大教授が「自転車のまち・宇都宮と世界の動き」のテーマで話した。引き続きパネルデイスカッションでは、村上ひとみ山口大准教授が司会を務め、今年4月から運用している自転車レーン（神原交差点から清水川交差点までの市道神原町草江線の900区間）を取り上げ、利用実態と課題、今後の可能性について話し合った。

パネリストの久保田后子市長は、人口減少と少子高齢化が進む中でネットワーク型コンパクトシティや低炭素型まちづくりが宇部の未来像として、自転車については「地域の拠点同士を結ぶ多様な交通手段の一つとして重要」とした。村田雅子建築士は「都会ではカフェが併設された自転車店があり、自転車メンテナンスだけでなく仲間の交流拠点にもなっている。そうしたファシリティ性も自転車人口を増やす要因になる」と提案した。

通学などで専用レーンと関わりのある山村季莉さん（宇部中央高1年）は「環境負荷を軽減したり、健康増進には自転車は有効。ただし専用レーンは狭く車との距離が近く怖い。むしろ歩道にレーンを設けてほしい」と池田梨瑛さん（慶進高2年）は「スマホ、傘差し運転などマナーにも課題があるが、ドライバーも赤信号で強引に突っ込むシーンも。追い抜かれる際に恐怖を感じるので自分は専用レーンは利用しない」と話した。

古池教授は「自転車にバックミラーを付けるのが有効」とコメント。村上准教授は「900区間の専用レーンだが、長い方が使い勝手が良いという指摘もある。利用率も上がってきており、歩行者、ドライバーも含めて繰り返し周知徹底するのが求められる」とまとめた。（浅野）